

[断章]

学生、大学教育、学問他について

教育社会学からの考察

武内 清

Essays on University Students, and Education

— Consideration from Educational Sociology —

Kiyoshi TAKEUCHI

I have worked for Keiai University for 6 years since 2011.

I would like to mention some of the comments from my blog I wrote on university students and education from a sociological point of view.

はじめに

敬愛大学は、私が勤めた3つ目の大学であるが（助手時代も含めると4つ目）、2011年より6年間勤務し、いろいろ感じるがあった。学生、大学教育、学問（教育社会学）、その他に関して、その感じたことの記録を最近の3年間（2014年7月－2017年3月）の私のブログから残しておきたい。

I 学 生

1 昔の大学生の自負

「かつて大学生がそれとして判別できる『型』を有していた時代があった。たとえば、男子学生は、詰め襟の学生服を着て、ハードカバーの本を小脇に抱え、電車の中では座らないといったスタイルを共有し、それが大学生としての身分を表わす象徴であった。(中略)しかし、今は誰が誰だか判別できない」(『東京大学は変わる』東大出版会、2000年)。

この文章を読んで、大学生はエリートで、大学生としての自負を皆もっていた、あるいは、「大学生としての自負をもちなさい」と教員が学生に諭すことができた時代があったことを思い出した。

今は同年代の6割近くが大学・短大に進学する時代で、大学生はエリートではないし、心情や行動、そして服装も、一般の青年と変わらない。それは、鼻もちならないエリート意識がなくていいということであるが、同時に「型」も「自負」も「気取り」もない平凡な青年になってしまったということである。電車やバスの優先席に座ろうが、授業中に私語をしようが、スマホをいじろうが、アイドルにうつつを抜かそうが、それは大学生として恥ずべきことではないと考えている。大学や大学の教師が、このような現代の大学生に対して、何ができるのであろうか。

2 学生の行動で驚くこと

最近、学生の行動で驚かされた事例をあげておく。

- (1) 授業のテキストを買わない、あるいはテキストを共有する学生が少なくない。1年生はさすがにそのような学生は少ないが、2年生以上になると、指定したテキストを購入しないで済まそうとする学生がかなりいる。好きなグループの音楽を聴きに行くのに1万円近くのチケット代は惜しくないが、2,000円前後の本は高いと思う。

発表に当たっても、毎回読んでくるように宿題を出しても、テキストは購入しない強者はかなりいる。1回4,000円相当払っている1回の授業なのに、2,000円前後の本代を惜しむ。

- (2) 教員が講義を始めると、すぐそれをシャットアウトし、他のこと（スマホをいじったり、私語をしたり、マンガを読んだり、眠ったりする）をする学生がいる。「講義アレルギー」があるのかもしれない。
- (3) 「活字アレルギー」も併せもっているのではないかという学生も見かける。講義の資料に文字の多いプリントを配ると、さっさとプリントを折りたたんでしまう。
- (4) 授業中1分たりとも黙ってられない学生がいる。教室を喫茶店かファミレスと勘違いしている。授業中のスマホいじりをやめられに学生がいる。傍に行って注意するとその時はやめるが1分もしないうちに、また見ている。

3 学生とスマートフォン

こども学科1年生59名にスマートフォンについて質問したところ、1名を除き皆所持者。

「授業中にスマホを使ったり、見たりすることが」、「よくある」22.4%、「かなりある」25.9%と半数近くが常習者。スマホはパソコン代わりになるので、パソコンはなしでも不便を感じない。パソコンの使用時間は短く、スマホの使用時間は長い（1日3時間以上が7割近く）。

スマホはメールとゲームとインターネットに使う。メール（LINEを含む）が一番多く、調べものにも3割が使っている（調べものがかなりあるということは、一概に、授業中のスマホ禁止ができない。そこにつけ込み、メールやゲームをして、授業の退屈を紛らわす学生も多くいる）。大学の教員たちは、授業中の私語対策ならぬ、スマホ対策をどのようにしているのだろうか？

4 幼稚園児と大学生

幼稚園児たちは園で2つのことを学ぶ（藤崎春代「子どもの発達から教育を考える」〔『教育の基礎と展開』学文社、2016年〕。1つは、「教室での学習場面の成立を可能にする教室ルール」（具体例で上がっているのは、挙手―指名のルール）。もう一つは、「2次的ことば」を使うこと。

「2次的ことば」とは、「1次的ことば」（＝「具体的な事例について、状況の文脈に頼りながら、親しい人と直接対話によって展開する言語活動」）とは違い、「状況の文脈を離れ、抽象化された聞き手一般を想定し、話の筋は自分で調整し、ことばの文脈で使うことば」である。つまり「2次的ことば」とは、教室での発言や発表の時使うことばを身に付けるということである。

幼稚園児が園で学ぶこの2つのことがらに思いを馳せると、今の大学生はこの2つのことが学べているのかどうかと疑問に思う場面に出会うことがよくある。

第1の「教室ルール」でいうと、大学の授業という場で、私語やスマホいじりが頻繁にみられることである。これは、3歳の園児がまだ幼くて、教室で今なされていることやルールを理解できず、自分の好きなことをやってしまうのに似ている。3歳児でも教室ルールを理解しそれに従うことのできる子もいるので、私語やスマホいじりをしている大学生は、それが理解できない3歳児以下の能力しかないともいえる。

第2の「2次的ことば」でいえば、学生を指名して発言を求めても、無言か、友達に話すような小さなつぶやきしか返ってこないことが多い。これも3歳児が学ぶ「2次的ことば」がまだ身についていない証拠と思えてしまう。

大学は自由な場であるが、その自由は、無知からくる幼い子と同じ行動をすればいいということではない。大学生には大学生の発達段階にふさわしい行動があるはずである。

5 大学生の4類型

学生を2つの軸で4つに分類できるのではないか。

1つの軸は、勤勉かどうか。授業に遅刻せず皆勤で熱心な受講態度の学生(A)とその逆(遅刻多く休みがちで受講態度もよくない)学生(a)。

もう1つの軸は、頭の回転がよくセンスもある学生(B)とそれがない学生(b)。

この2つの軸を交差させ、学生の4類型(AB, Ab, aB, ab)を作ることができる。

ABは、いわゆる優等生なので問題はないであろう。ただあまり面白味はないかもしれない。

Abは、コツコツ努力する学生で、時間はかかるかもしれないが、いつか芽が出ることであろう。

aBは、教員にとっては少し取り扱いづらい学生だが、能力もセンスもある学生なので、それを何とか伸ばしてやりたいし、伸ばしてほしいと思う。

abは、大学に来て意味がなかったのと思うが、高い授業料を払ってくれている「お客様」なので、むげに扱うわけにはいかない。個人的に話してみると、それぞれいい面をもっていることがわかる場合が多い。

6 学生のグループ発表

大学の演習(ゼミ)などで、学生にグループ研究の発表をさせると、なかなかいい発表になることが多い。今は、インターネットでいろいろ調べられるということもあるが、その内容もさることながら、発表のプレゼンが上手で、思わず聞き惚れる。

今週の、敬愛大学2年生の専門研究の演習では、「子どもとマンガ」という題で、大学生に対して実施したマンガに関するアンケートの結果の報告の他に、マンガに関する学生たちの知識の広さや思いの深さ(好きなマンガ本のシリーズを揃え、繰り返し読むという学生も多い)を知ることがで

きた。マンガの内容を1人が語り、それをめぐって様々な議論が飛び交う学生の表情は、私の教育の話を聴く時の様子と大違い。心から楽しんでいる。

「マンガは想像（創造）力を培う」という学生の説明に、私は「マンガは映像から人の心理を想像するのに対して、小説は文字から場面（映像）を想像するので、その想像（創造）力の方向は逆。どちらも大切」とコメントするのがせいぜい。

あだち充の『タッチ』についての話題では、私も少し参戦できたが、皆が読んで盛り上がって議論された『ワンピース』については、読んでいない私にはちんぷんかんぷん。

別の日に行われた「大学生のキャンパスライフ」の発表では、大学生の類型（タイプ）、独自の調査、大学生の言葉、自分の一日という4つの発表があった。大学生の類型（タイプ）は、「ヤンキー大学生」「フリーター大学生」という名称もあって、そのネーミングの巧みさに感心した。それぞれの発表（プレゼン）に対して、盛んに突っ込みやヤジが飛び、それに対して素早い回答があり、そのやり取りを聞いていると、可笑しく。時間の経つのも忘れるほどであった。これはゼミのメンバーが親しい関係のものばかりということもあり、かなり遠慮のない突っ込みもありながら（たとえば、「そんな話もういいよ!」）傷つく様子もない。学生の発表能力（プレゼン能力）の高さも感じた。

7 学生のスピーチ

今日の敬愛の2年生のゼミでは、1人20分の持ち時間で、自分の好きなことを発表してもらった。その発表の内容と話し方が素晴らしく、とても感心した。今の学生は、表現能力、プレゼン能力がとても優れている。学生の素顔もかなり見えた。

最初のK君は、今好きで打ち込んでいる水球の話をしてくれた。水球という競技があることすら知らなかった私にとって、驚くことばかりであった。水球は水の中の格闘技のようなスポーツで、オリンピック種目

にも高校の部活動にもあるという。A君は中学時代に民間のクラブで始め、今も楽しんでいるという。そのルール、競技のポイントなどわかりやすく説明してくれた。ネットでも競技の様子がみられるという。

2番目のSさんは、今やっているアルバイト3つの話を、面白可笑しく話してくれて、皆聞き惚れた。マリNSTAJAMの売り子、スポーツクラブでの子ども向け体操指導、居酒屋のウェイトレスの3つのバイトを掛けもちしている。いずれも人とふれあうことが多い職種で、そのふれあいを持ち前の明るさとユーモアとパワーで楽しんでいる。どこにもファンがいて、楽しくやりがいがあるという。この能力と経験は、将来の小学校教師になった時生かされるであろう。

3番目のTさんは、アイドルメンバーとしての活動を話してくれた。(私のゼミにアイドルがいるとは知らなかった)。高校時代ダンス部で活動し、ダンスが好きで習っていたが、アイドルのオーディションを受けるように勧められ、ダンスや歌のレッスンを無料で受けられるということで受け、合格して、週一程度、地元で活動しているという。メンバーの中の競争、確執(誰がセンターをとるか、誰のプロマイドがよく売れるかなど)もあり、辛いこともあるが、自分達の活動が人々の笑顔を引く出すことに喜びがあるという。Tさんもいい小学校教師になりそう。

私の知らなかったゼミ生の素顔をみて、感動のゼミであった。これは、来週も続く。

8 大学生の成長

大学生の1年生から4年生への成長には著しいものがある。大学生も4年生になると、さすがに皆しっかりしてくる。

大学の授業だけでなく、教育実習、介護体験、部・サークル活動、アルバイト、旅行、合宿、交友関係を経て、大きく成長する。

就職難の時代の中であって、今の学生の前途は決して楽観できるものではないが、それぞれ大学時代の経験を生かして、逞しく生きていくであろう。

9 学生文化の大学類型差&大学差

私達の大学生調査（『現代の学生文化と学生支援に関する実証的研究』2014年2月、科研報告書）から、学生文化の大学類型差&大学差を報告する。今回、取り上げる大学は、「伝統総合大学」（入学難易度60以上）のA大学（国立）とF大学（私立）、「中堅大学」（偏差値59～50）のC大学（国立）とH大学（私立）、「新興大学」（偏差値49以下）のW大学（私立）とハ大学（私立）の6校である。いずれも首都圏に所在する大学である。

一般入試による入学は、国立大学（A, C）に多く、私立大学に少なく、特に私立の「新興大学」（W, ハ）は少ない。一般入試で入学した学生は、高校時代の受験勉強をよくしている。推薦やAO入試で入学した学生は、高校時代にあまり勉強をしていない。

第1志望で大学に入る率は、大学類型（偏差値）によらない。「新興大学」にも、推薦やAOで入学する学生は、第1志望で入学してきている。

「有名だから」という理由で、その大学を選ぶものが「伝統総合大学」（A, F）に多い。「新興大学」（W, ハ）では少ない。

「伝統総合」大学（A, F）は教養志向が強く、資格志向は少ない。逆に、「中堅」「新興」大学では、教養志向が少なく、資格志向が強い。

部・サークル活動参加者は、「伝統総合」大学（A, F）、中堅大学（C, H）で多く、「新興」（W, ハ）で少ない。

友人との交友は、「新興大学（W, ハ）」で盛んである。「一人でいるのが好き」は、「伝統総合」（A, F）で多い。

「学業・勉強の比重」は、「大学類型」差はあまりない。全体に学生は「学業・勉強」に比重をおく傾向がふえている。男女差があるが、大学差もあり、F大学が高く、C大学が低い。授業全体満足度も同様で、高いのは、F大学で、低いのはW大学である。

授業への出席率の高いのは、同様で、全体に学生は、授業によく出ている。「大学類型」差はなく、大学差がありF大学とC大学で高い。

先生との関係に満足度が高いのは、ハ大学、F大学、C大学である。低

いのはA大学である。

職員との関係の満足度が高いのは、新興大学（W、ハ）である。

アルバイトの種類に大学差がある、家庭教師は偏差値の高いA大学とF大学で多い。スーパーのレジや接客、ウエイトレスは偏差値の低いW大学とハ大学に多い。

「大学の全体の雰囲気満足」は、「伝統総合」及び「中堅」で高く、「新興」（W、ハ）で低い。「今の大学に入ったこと」への満足度も「伝統総合」及び「中堅」で高く、「新興」で低い。大学に対する総合的満足には、大学のチャーター（知名度、偏差値）が働くのであろう。

「体の不自由な人や年寄に席を譲る」は、国立大学（A、C）で少なく、私立大学で多い。

全体的に、大学類型や大学差は、入学の時にかなりありながら、大学生活を送るうちに、差が小さくなっている。

Ⅱ 大学、大学教育

1 大学教育、施設の工夫

関西大学で「国内留学」の授業が学生の発案でできたという記事新聞で読んだ。留学生の多い大学も意外と留学生と日本人学生の交流は少ないので、大学の授業の中に、異文化の交流を目的とする科目があるというのはいいことだと思う。外国の人との交流は、ワクワク感があるということ、体験を通して、学生に知らしめることは必要だと思う。

大学という場合は、学生の自主性を重んじる場であるが、自然のままに任せておくと、新しいことが起こりにくい場でもあり、そのきっかけを大学が用意することは必要になっている。

大学の施設、設備の快適さも、今の時代に欠かせない。特に、毎日食事をとる食堂のよさは、大学の魅力のひとつであろう。神田外語大学の学生食堂が、最近センスのよいレストラン風に一変して、学生もうれし

そう。

2 これって アクティブ・ラーニング？

大学の授業では、一方的な講義型ではなく、学生が授業の中で主体的に学べるアクティブ・ラーニングの手法を取り入れるように、盛んに推奨されている。必ずしもこれ（アクティブ・ラーニング）を意識したわけではないが、私の最近の授業（講義）は、私が話す時間は少なくして、テキストや配布した資料を各自読んでもらい、その内容を読み取って、質問に答えてもらうという方式をとることが多い。私のグダグダした説明より、説明の文章を読んでもらった方が早い場合が多いと思うからである。学生は、そのくらいの読解力をもっている。

質問に対する回答はリアクション用紙に書いてもらい、その回答を黒板に出て書いてもらい、回答を皆で共有する時もある。次回にリアクションの一部をプリントして配る場合もある。

リアクション（授業のコメント）はこれまで、質問や感想などを自由に書いてもらっていたのが、最近はあらかじめ授業の流れに沿った質問をいくつか用意して、書いてもらうという方式をとっている。その質問の回答は、配布資料の内容を読み取らないと答えられないようなものを用意しておく。さらに、単に内容の読み取りだけでなく、それを理解した上で、自分の考えを書くように仕向けている。

この方法は、学生の志向を一定の方向に誘導する面ももち、自由な思考が求められる大学にはふさわしくないかもしれないという危惧も感じながら、試行している。

敬愛大学の学生たちは、私の出した質問によく答えてくれているように思う。書かれたリアクションを読むとそれが感じられる。それは、一部の学生に限らない。多くの学生がかなりの分量の回答を、的確に書いていることからわかる。

3 大学にくる意味

大学に来る意味を考えてほしい。大学に入学し4年間在籍し卒業するということは、経済的に考えると、(私立)大学の授業料など400万円だけでなく、高校卒業後4年間働いて稼げるお金1,200万円(300万円×4年)、合わせて1,600万円を放棄することを意味する。毎月5万円くらいのアルバイトをして稼いでも1年間に60万円、4年間で240万円にしかない(1,360万円の損)。

これだけのお金をかけて4年間の大学生活で得られるものに何があるだろうか。保育士や幼稚園教諭になりたいのであれば、高校の専門学科、(保育)専門学校、短大に行けば資格が取れるので、4年制大学にわざわざ来る必要がない。

「4年間遊べるから」「大学で友達ができるから」という理由をあげた人がいるが、そのような理由であれば、高校卒業後、大学に入学せず、親から授業料分の400万円のお金をもらって、遊んだり街で友達をみつければいい。

確かに、4年間大学にいてだけで、大学卒という一生通用する学歴を得ることができるし、「〇〇大学卒」という肩書や、何かの資格は得られる。さらに自然に得られるものはたくさんあるだろう。しかし、高校までと違い、大学は自分で努力したり求めたりしないと、得るものが少ないところである。

大学の授業から得るものはほとんどない、単位はなるべく楽に取れるようにして、授業は適当に聞き、最小限の課題をこなし、おしゃべりやスマホでやり過ごせばいいと考えているとすると、大学に払っているお金(授業料など)や放棄所得から考えると、何と損なことをしているのかと思う。

4 読書の大切さ

教員を目指す学生から「豊かな人間性を身に付けるのに必要なことは、

何ですか。私はいろいろな人とのコミュニケーションをとることだと思
いますが、先生はどう思いますか？」と質問された。

教員採用の条件に「豊かな人間性」という言葉があるせいであろう。
今の学生にとって、人とのコミュニケーションや経験が自分を豊かにす
るものとして認識しているらしいことに、世代の差も感じた。我々の世
代では、「豊かな人間性」と言えば、即読書をあげることであろう。

今学生の周囲にいる人には、偉大な人はいないであろうし、また偉い
人がいたとしても、未熟な学生とのコミュニケーションではその人の最
良のものを引き出せないことであろう。それよりも偉大な人が書いた書
物を読み、そこから様々なことを読み取る方が、「豊かな人間性」を形成
するのに役立つのではないか。

そのようなことを学生に答えたが、怪訝な顔をされた。学生たちは、
直接経験こそ学びの中心であり、読書や大学の講義はあまり重要なもの、
役立つものとは思っていないのではないか。

昔勤めていた武蔵大学の日本文化学科の瀬田教授が、就職が決まって
いたにもかかわらず卒論が出来ずで落とした学生に、「卒論を書くという
ことは、古今東西の優れた歴史上の人物と『対話』することであり、そ
のことは現実経験を積むこと以上に大切だということをわかってほしい。
そのためにあなたの卒論を不可とする」と言っていたのを、今思い出す。
今の時代、経験より読書、と私も言いたい。

5 大学生の態度やマナーの教育について

大学は最高学府であると同時に、社会に出る前の「最終学府」である
(鷗北貴史氏の言葉)。したがって、社会に出て恥ずかしくない学力(分数の
考え方がわからなければ、分数を大学で教えなければいけない)を身につけさ
せ、社会に送り出す責任がある。学力や知識ではなく、態度やマナーに
関してはどうであろうか。

学生が、社会人としては非常識な行動や態度をとる場合がある。社会
に出てからそのようなひどい行動や態度をとったら、完全にアウトで、

上司から疎まれ、皆から軽蔑され、その職場を追い出されるのは必須である。学生はそのことに気がついていない。

大学教員は、学生がまだ「子ども」だからという理由で、それを許したり黙認すればいいのであろうか。それとも大学教員はその学生が社会に出たからのことを考え、厳しく叱責すべきなのであろうか。

これは、学生を半人前の大人と考えるか、一人前の大人と考えるかにもよる。また、大学をどのような場と考えるかにもよる。大学は、学生が荒波の世間を泳ぐ能力やマナーを身につけるための安全なプールのような場であり、かなり非常識なことも許される実験場なのであろうか。それとも、荒海と同じルールの適用し、社会のルールを厳しくたたき込むべき場なのであろうか。

6 大学時代の合宿

自分の学生時代を思い出してみても、大学時代の合宿の思い出は印象深くいつまでも消えない。大学の教室で学んだことはほとんど忘れているが、合宿でのことはよく覚えている。大学教育の中で、仲間と寝食をともにした合宿の経験は貴重である。

私の場合は、大学で入ったサークルでの1年生の5月の鎌倉のお寺の本堂に50人も学生が雑魚寝をし、真っ暗な中で上級生から話しかけられた時の戸惑いは忘れられない。学科でも上級生の企画してくれた山中湖の合宿（そこではマルクス・エンゲルスの本を読むように勧められた）、教育調査のための合宿（面接のために古河市の安い旅館に泊まり込んだ）が思い出される。

武蔵大学に勤めた時は、1年から4年まで学年を超えたゼミ合宿を毎年夏に行い、学生の交流を計った。そこでは上級生がとても立派なことを話すのに驚いた。武蔵のゼミ合宿では皆よく飲み、宿泊先に迷惑をかけ、同じ場所を2度と使えないということも多かった。体調を崩した学生に付き添い、救急車に乗ったこともある。私の退職の時、武蔵の多くの卒業生が集まってくれたのも、この毎年の合宿のせいではないかと思って

いる。

上智大学では、1年生が入学するとすぐ、1泊2日のオリエンテーションキャンプがあり、これが学生たちの友達作りと大学への適応を高めるはたらきをしていた。上級生のヘルパーのお蔭もあるが（様々なゲームや寸劇やイベントを1年かけて企画していた）、行きのバスと帰りのバスで、新入生の顔つきや親密度がまったく違った。

上智の教育学科では、各ゼミが競って工夫したゼミ合宿を行っていた（歴史的な教育の建造物の見学など）。私は見学よりはゼミでの発表や話し合いを重視し、2泊3日で5回のゼミでいろいろ発表と討論を行った（場所は、軽井沢や山中湖など）。他大学（横浜国大、立教）との合同でゼミを行ったこともある。また、隣の研究室の加藤幸次先生のゼミに便乗させていただきアメリカ（NY, UWなど）や香港の学校訪問の旅に出たこともある。

しかし、最近学生の合宿は、ゼミでもサークルでも少なくなっているような気がする。新入生向けのオリエンテーションも、合宿はせず学内で実施することが多い。古い世代から見ると、大学のよさが何か失われているような気がする。

7 研究者に求められること

大学の研究者に必要なことは2つある。1つは、グローバルな視点（比較の視点）をもつこと。具体的には、海外の動向にも敏感であること。そして海外の研究動向に常に目を配り、最新の研究動向を押さえておくこと。

もう1つは、日本の現場の現実を、確実に把握し、感受性豊かな鋭い視点と実証的なデータで押さえ問題点を的確に掴むこと。

この2つが、車の両輪のように噛み合い、論を展開したり政策提言をすることが、研究者に求められることであろう。このような、グローバルな視点（比較の視点）と現実感覚の視点が、研究者に求められるのは、いつの時代も変わらないであろう。

Ⅲ 講義内容（一部）

1 利己的行動、利他的行動

M・ウエーバー、作田啓一によれば、人の行為を解釈する時は、第一に自分の利害に基づき、自分に得になることをするという〈目的合理的〉な見方をすると多くが説明がつく。それで解釈できない時、その人の利害を離れて、その人の価値観に基づく〈価値合理的行為〉であるとみるとよい。そして第三に、好き嫌いで行動する〈感情的行為〉とみる。

自分の利害を離れて行動することは、そんなに頻繁に起こるわけではない。正義のためや価値的行為のようにみえて、そのホンネは自分の利益のためということもよくある。

人は、自分の利益のために行動する自己愛の強い志向をもっているが、その程度は人によるのかもしれない。自分の利益より、家族や子どものため、友人のため、所属する集団や組織のため、国家や地球のために、働こうとする人、働いている人もいる。自分のための利己的な行動でも、他者の立場を考慮に入れた時、それは利他的を含み、利己的な意味が変わってくる。人は社会的な動物であり、利他的（他者の利益を考慮する）にならざるをえない。

2 価値志向による人の分類

人の価値志向により、人が4種に分けられるのではないかと思った。

分類の第1の軸は、「もの志向」か「人間志向」か（理系か文系かと言ってもよい）。第2の軸は、業績重視か属性重視か（外面評価重視か内面重視かと言ってもよい）。

この2つの分類軸を交差させることにより4つの象限ができる。これが人の分類になる。

お金人間（もの志向・業績重視）、地位人間（人間志向・業績重視）、

愛情人間（人間志向・属性重視）、趣味人間（もの志向、属性重視）。

この4つは、人間の類型でもあり、また価値あるものとして人が求めるものの分類でもある（T・パーソンズのAGILに対応している）。

どれか1つというよりは、人により求める比重が違うと考えてもよい。（たとえば、私の場合は、最初から2-2-4-2かもしれない。若い時はもう少し最初の2つが多かったかもしれない）のであろうか。今の若い人の価値志向の割合は、どうであろうか。

3 コトバが現実を作る

客観的な状況があってもなくても、コトバ（予言）によって客観的な状況が作り出される（例；あの銀行が潰れるという噂によって、人々が預金を引き出し本当にその銀行が潰れてしまう）ということがあるのは、社会学の常識である（予言の自己成就）。

村上春樹は、地下鉄サリン事件の被害者にインタビューしてその記録を『アンダーグラウンド』に、加害者にインタビューして『約束された場所で』に残す。それを執筆するにあたり、ノンフィクション作品の基本ともいえるべき「事実の裏をとる」ということをしない、しかもそのことを自分の方法としているという（加藤典洋『村上春樹は、むずかしい』岩波新書、2015年）。

〈「語られた話」の事実性は、あるいは精密な意味での事実性とは異なっているかもしれない。しかしそれは「嘘である」ということと同義ではない。それは「別のかたちをとった、ひとつのまぎれもない真実なのだ」〉（『目じるしのない悪夢』『アンダーグラウンド』）。

この方法は、「近代的な遺制」を脱した現代の哲学思想の知の地平では常識的なことだと、加藤典洋は述べている（前掲）。エビデンスを重んじる現代の教育界の風潮や社会学の実証的方法にも、一石を投じる指摘だと思う。

4 多文化教育と教師

国際化、グローバル化する社会の中で、異文化間の視点や多文化教育の視点をもった教育実践が求められている。それは、「単一文化論的視点」や「比較文化論的視点」ではなく、文化が相互作用を起こし相互作用や共生をする「異文化論的視点」（佐藤郡衛）であり、マイノリティの視点に立った公正を目指す「多文化教育」の視点（松尾知明）である。

多文化教育の「転換アプローチ」（バンクス）により、自分とは違った視点からの考察が重要である。たとえば、第2次世界大戦について、アメリカの白人男性の視点からではなく、女性の視点、黒人の視点、日系アメリカ人の視点から考えてみるのが重要である。

日本の学生の「転換アプローチ」の練習問題として、「広島・長崎への原爆投下に関して、日米の両方の視点から考えてみよう」という課題を学生に出した。以下はその回答の一部。

〈日本の視点〉 広島・長崎に原爆を投下し、多くの人を殺したのは、ひどい。アメリカは怖くて憎い。非戦闘員を無差別に殺すってありえない。同じ人間なのに。そこまでしなくてもよかったのに。原爆を投下する以外にも方法はあった。そんな大勢を殺す必要はなかった。無残に殺した、許せない。理由を知りたい。2度も落とさなくても戦争を終わらせることはできたであろう。非人道的だ。戦争は残酷。道徳的に間違えている。アメリカはひどい国だ。卑怯だよ。無残すぎる。

〈アメリカの視点〉 真珠湾攻撃への仕返し。アメリカ国民をこれ以上、殺させないため。戦争を終わらせるため。早く日本を降伏させるために仕方がなかった。日本全体が戦争加担者。必要な犠牲。東京に落とさないだけ、ありがたいと思うべき。これ以上戦争を長引かせれば、原爆以上の被害が出る。日本北部をロシアに奪われないため。見せしめ。力の強さを示すため。日本を変えるため。日本に目覚めさせるための手段。（殺戮の）規模の大小は問題にならない。結果よ

かった。

学生の思考は柔軟で、このように日本人の被害者意識一辺倒の視点だけでなく、原爆を落としたアメリカの視点からも考えることもできる。ここから「多文化教育」の視点まで持ち上げていきたい。

5 ジェンダーの社会学

社会学や教育社会学の分野の研究のひとつに、「ジェンダーの社会学」がある。

日本のこの分野の第一人者は上野千鶴子で、私も氏の本を何冊も読み、講演も3回ほど聴きに行った。またこの分野の本は、かなり読んだ。授業でその内容を紹介することがある。

社会学や教育社会学の立場は、性やジェンダーは生物学的なものより社会的なものが重要で、人や社会がそこを自覚して変えれば、男女平等は達成されるというものである。

生まれた時、性別を間違えて判定され、思春期になるまでそれに気づかず育てられ、思春期にその間違いが判明した後、その後の人生をどちらの性で生きるかを考えた時、思春期に判明した生物学的な性より、それまで育てられ自分も思い込んでいた社会的な性の方に従った方が、アイデンティティの危機もなくスムーズな人生を歩めるという多くの例を、上野千鶴子は紹介している。

幼稚園や保育園で、保育士が「男の子、女の子」という言葉を頻繁に使い、子どもに男女の区別をつけるような扱いをすると、子どもはその影響を受け、性自認意識が高まるという研究もある。子どもを半分に分け、手洗いに行かせるとき、「男の子は先に手を洗い、その後女の子が洗いなさい」と指示するより、「イチゴ組（男女混合の班）とメロン組の人が先に手を洗いにいきなさい」といった方が、子どもがあまり性を意識しないという実践も報告されている。

テレビコマーシャルの性により偏り（「あなた作る人、私食べる人」他）は、これまで上野千鶴子の研究（『セクシーギャルの大研究』）はじめ多くで指摘

されてきたので、今ではほとんどなくなっている。

教科書の記載内容も、男性優位で女性軽視という傾向は、日本弁護士会他から厳しく指摘され、かなり改善されている（歴史上の人物では、男性中心は否めないが）。

ジェンダーの問題は、まだわからない部分も多いと思う。また、「せっかく男女という違う性があり、そのため人生に色が添えられ、楽しいことがたくさんあるのに、それを無くそうとするジェンダー論は好きでない」という素朴な疑問もある。

今日の朝日新聞朝刊には、「性が決まる仕組み、人の体の『原型』は女性」という記事が載っていた。生物学的に興味深いことが書かれており、社会学や教育社会学の立場からも学ぶべきことが多くあると感じた。

6 教職概論 まとめ

- ① 教職概論は、文字通り教職に関して、その概要を学ぶ分野である。
- ② それは、学校の教師になる（教職に就く）ために必要な内容（知識）であり、同時に、教職や教育に関わる人（教育委員会、教育関係者、親など）にとっても必要な知識（教養）である。
- ③ 教員採用試験の「教職教養」の分野において、「憲法」「教育原理（論）」「教育課程」「教育行政」「教育心理学」などと並んで、この分野からも出題される。
- ④ 教職は、私的な塾やお稽古の教師などとは違い、公（国家）が認定した教員資格であり、公〔国家〕の定める法律（憲法、教育基本法、学校教育法、他）に基づいた職務行動が要求される。教職に関連するこれらの法規に関する理解が求められる。
- ⑤ 教員採用試験は、都道府県ごとに行われる。求められる教員像に関して、国（文部科学省、中教審答申など）が提示するものと、さらにそれを具体化し、地域に実情に合わせた各都道府県教育委員会の提示するものがある。教員採用試験を受けるものは、文部科学省や各都道府県教育委員会のHPなどで調べ、理解しておく必要が

ある（東京都教育委員会のように冊子を発行しているところもある——配布済み）。

- ⑥ 教員の児童・生徒に対する指導には、大きく教科指導と生徒指導の2つがある。前者のために、教師は、各教科の知識と指導法を身につけ、児童・生徒が各教科を十分に学べるような実力を身につけなければならない。また後者のために、教師は、児童・生徒の模範となり、児童・生徒の社会化に寄与するような人格、行動様式、教育技術（コミュニケーション力、集団力学など）を身につけなければならない。
- ⑦ 教師（教職に就く多く人）は、学校という公の組織に属し、その組織の規則に従い行動することが期待される。したがって、教育委員会の仕組みや管理職の権限、校務分掌などの学校組織の特質を理解しておくことが必要である。また、学校組織の中で、組織人として生きる人間関係能力も養う必要がある。後者に関しては、大学での様々な体験（キャンパスライフ）が役立つであろう。
- ⑧ 学校は地域社会の中にあって、地域の人や児童・生徒の親との関係も大切である。教師は社会性を身につけ、常識ある行動をとる必要がある。「モンスターペアレンツ」の出現に対しては、適切な知識と技術をもって対処する必要がある。
- ⑨ 教員採用試験に受かり教職に就けば、後は自動的に教師としての仕事が遂行できるわけではない、教師は学び続け、知識や技術の向上を目指さなければならない。教師の研修制度が公に用意されている。自己研修も大事である。
- ⑩ 教職には、フォーマルな側面だけでなく、インフォーマル側面もある。それは、教育目標があいまいで、具体的な教育現場は、教師の自由裁量に任される部分も多いせいでもある。教師の人柄や思想や力量や考え方によって、実際の教育や指導が違っている。教師の人柄や実力が問われる所以である。
- ⑪ 教育や教職には長い歴史がある。古今東西の教育思想、教育理論、

教育実践、過去の教師像に学び自分の教師としての力量や深さや幅を広げる必要がある。

- ⑫ 教師を描いた文芸作品やマンガなど、そこから学べることも多くある。教師の隠れた側面やホンネ部分を暴露し、教師とは何かを、根底から考える材料になる（「二十四の瞳」「GTO」「ハレンチ学園」他）。
- ⑬ 外国の教育や教師のあり方、あるいは教育方法を知り、日本のそれと比較することは、教育や教師に関する知識や知見を深めることになる（比較教育的視点）。また、現代のグローバル化した社会において、教育の国際化、異文化間接触は進んでいる。多文化教育、異文化間教育の視点を学び、海外子女問題、帰国子女問題、ニューカマーの教育などに対処する必要がある。
- ⑭ 情報化社会の中で、情報機器の適切な取り扱いのできる教師が求められている。デジタル教科書、インターネット、ケータイの取り扱いが問われている。
- ⑮ 社会規範の揺れ動く時代にあって、教師の道德意識、マナー意識は大事になっている。児童・生徒の模範となると同時に、その指導が大切になっている。
- ⑯ 教育は、政治、経済、社会、文化、科学など様々な分野と密接な関係がある。教育とそれらの分野との関係を日頃から学び、視野を広げることは教師として必要である。児童・生徒は、教師の広い視野から学び、社会化される。

このように、教職には、幅広い知識と技術と実践力が要求される。

IV 教育社会学について

1 教育社会学の魅力

「教育についての理想や理念は大切だけれども、それだけではだめ、とおもう人には教育社会学はむいています」「いままで学校生活をしてきて、

気になる点が多々あり、教育社会学を学ぶことによって、『そういうことだったのか』とふにおちるようになる快感みたいなものが教育社会学の魅力です」「教育や学校は近代社会の骨格をなすものですから、教育の社会学的研究をつうじて近代社会つまりわれわれが生活している社会を相対化してみるという壮大な志もあるのです」（竹内洋「教育社会学」『AREA Mook 13, 教育学がわかる』1996年）。

上記は、教育社会学の魅力を的確に表わしていると思う。しかし、これを、学生に説明するには、具体的な例が必要である。それが意外と難しい。

私がよく具体例に出すのが、「学校の潜在的カリキュラム」についての説明である。学校には明示されたカリキュラムとは別に、明示されていないけれど、学校で生活することで自然と身につけてしまうこと（潜在カリキュラム）があるということをあげる。

たとえば、中学校校則で、制服の規定で「理由のない」ものがある。しかし、その「理由のない」校則に従順に従うことは、社会に出てから「不当な」法律に従順に従う心性や態度が形成される。さらに、学校の退屈な授業に堪えることができれば、社会に出てからどんな退屈な単純な仕事にも耐えられる。

「授業は退屈であってもよいと思う。私のこの退屈な授業に堪えられれば、社会の中のどのような仕事に堪えることができますよ」と、付け加える。この説明の意図は、事実を述べることにある。教育の理想やあるべき姿を述べているわけではない。ところが、多くの学生は、そうはとらない。「学校にある無意味な校則は撤廃すべきだ」「学校の授業が退屈でいいわけではない。教師は生徒の興味を引くように努力すべきだ」「先生はこの退屈な授業をすぐやめて、学生のディスカッションなどを取り入れるなど、授業を工夫すべきだ」と。

教育社会学は「理想や理念は大切だけれども」（こうあるべきだということも大切だけれども）、その前に事実（存在）を明らかにすることに重点を置いている。それが教育社会学の魅力であるということがなかなかわか

ってもらえない。学生の常識を揺さぶろうという努力が、退屈な授業の言い訳ととられてしまう。使っている例が悪いのであろうか。学生が素直すぎるのであろうか。

2 学生のエデュケーションへの理解

エデュケーションを専門に学ぼうとしているわけではない学生（ほとんどが教職免許のために受講している学生）に対して、エデュケーションの学問的と意義と特質を講義することは、難しい。

神田外語大学の「エデュケーション」の授業で、2つの資料を使って説明した。

資料

- ① 藤田英典「エデュケーションのパラダイム展開と今後の課題」（天野郁夫・藤田英典・荻谷剛彦著、改訂版『エデュケーション』、放送大学教育振興会）。

藤田氏は放送大学の映像教材では、戦後の社会の変動とエデュケーションの研究内容や方法の対応を鮮やかに描き出している。エデュケーションのパラダイムとして機能主義、人的資本論、方法的実証主義、葛藤理論、解釈的アプローチの5つをあげている。

- ② Sociological Theories at a Glance, deMarrais, K. B. & M. D. LeCompte, 1999, The Way Schools Work: A Sociological Analysis of Education。

エデュケーションの理論として、機能主義、葛藤理論、解釈理論、批判理論の4つをあげ、その焦点、前提、主要な概念、分析のレベル、主要な問いと調査のトピック、批判、貢献した人を詳細に説明している。

学生から下記のようなコメントをもらった。

エデュケーションがどういったものなのかというのが改めてしっかり理解することができました。それぞれの時代背景に合わせて教育をどう調整してきたかが理解できました。印象的なのは、時代が発展し便利になるほど、生徒が荒れてくるということ／日本の教育の歴史（流れ）について学んだ。社会と教育はつながっていると思った／戦後のエデュケーション

学は時代が進むごとに発展を遂げてきた。時代ごとに様々な課題が出て来て研究も必要になってくる。教育における幅広い現状を考えてみると教育社会学なんだと理解した／教育社会学の視点と他の学問の違いがわかる授業だった。教育社会学の見解というのは重要であると思った。社会が子どもの発達に大きく関わってということが再認識できた／パラダイムは問題の立て方、答え方の模範となるものというのですが、何となく理解できますが、少し難しいところでした／葛藤理論や相互作用理論などを用いて分析し、よりよい環境を作ることでも教育社会学のひとつの役目なのかと思いました。

3 教育社会学の2つのアプローチ

教育社会学は、教育と社会との関係を扱う分野だが、人の社会化に焦点を置くか、教育の社会的機能に焦点を置くかで、そのアプローチも違ってくる。

私が学部・大学院時代に学んだ東大の教育社会学の研究室の雰囲気は「経済発展と教育」や「社会開発と教育」というテーマで教育の社会的機能をマクロに考察するもので、個人の社会化などミクロなことは、他の分野（心理学など）に任せておけばいいことで、教育社会学の使命はもつと別のところにある、教育の制度をどのようにし、教育はどのような社会的機能を果たすべきかを考えるべき、と考えられていたように思う。別の言い方をすれば「研究はミクロなこと、たとえば自分のアイデンティティ探しのために行うのではなく、マクロな社会的に有用なことを行うもの」ということである。

今回、小林雅之・東大教授の給付型奨学金に関する意見（日本経済新聞、2017年2月23日）を読んで、当時の東大の教育社会学研究室のマクロな研究の伝統がしっかり東大の研究者に受け継がれていることを感じた。

4 社会の教育社会学への理解

「学会の集まりは新興宗教の信者の集まりのようなもの」と教育社会学

者の竹内洋氏が書いていて、なるほどと感心したことがある。

自分の専門のことで一番大切に思っていることが、学生はおろか、同じ学科の教員にも理解されず悔しい思いをすることが多い。一方、同じ学会（学問分野）のメンバー同士は、学問の共通土台があり、世代、性、大学、地位が違って、話が通じると感じることができる。年1回の学会の大会で、同じ学会メンバーと交流することで、日頃の周囲の無理解のうっぶんを晴らすことができる。

教育社会学の特質として、自己の方法論や立ち位置を問題にするという自己言及的で謙虚なところがあり、それは新興宗教とは違うところだと思う。

日本では、戦後学会もでき、いくつかの大学で講座や科目のもうけられている教育社会学であるが、その地位は安定していない。

優れた多くの教育社会学の論文や著作が発刊され、多くの教育社会学の研究者が、学会、マスコミ、政府や都道府県の審議会で活躍しているが、大学で教職科目に教育社会学は入っていないし、教育社会学という科目が開設されている大学もそれほど多くない。

これは嘆くより、研究者が、それぞれの立場で地道に努力し、教育社会学的な見方の有効性を訴えていくしかないだろう。

5 柔軟な思考が大事

私は学部・大学院そして大学（武蔵大学、上智大学）に就職してからも教育学（正確には教育社会学）を学び、且つ教えてきたが、それらは教育研究を目指していて、教育実践とは距離をおいていた。敬愛大学に6年前に奉職するようになり、はじめて教員養成や教育現場というものを意識するようになった。

敬愛大学こども学科の学生は、小学校の教員になることを目指して入学する者がほとんどである。大学のカリキュラムも教員採用試験や教育現場向けのものが多く、学生たちは、教育現場や実践に役立つ内容を教えられる。敬愛大学の卒業生は教育現場に出て、即戦力として教える力

を備えている。それは敬愛大学のメリットだと思う。

ただ、それは『教育工場の子どもたち』（鎌田 慧、岩波書店、1984年）と揶揄されるような狭いものであってはならない。

教育実践に役立つ技術や方法を学び、実質的にそれを身に付けることはとても大切なことである。しかし社会や技術が大きく変化していく現代にあっては、それだけでは足りない。大学で学んだ知識や技術はすぐ古くなり、また現在の教育現場で通用している考え方や方法は将来もそのままとは限らず、時代にあった新しいものが求められる。それは、各自が自分の力で開発していくものである。

そのような新しいものを作り出す力（汎用的能力や技術）を、大学時代に身に付けたいものである。それは、限定された分野で通用する実践や技術ではなく、広い柔軟な視野で考え、新しい状況に対応できるものである。その際、先輩や同僚との協働も必要であり、その能力（コミュニケーション能力）も養いたい。

大学の教養科目や専門科目、ゼミなど一見教職に役立ちそうもない科目こそ、実はこのような新しい柔軟な思考を養うものであることが少なくない。それが、専門学校と違う大学の特質である。

教育現場や学校の教師のおかれた環境は、狭いということも自覚すべきであろう。子ども相手に、教師は奢ってはならない。「よき教師」がよき市民とは限らない。教師の狭い枠組みから脱した柔軟な思考が必要である。

敬愛の学生には「明朗」「子ども好き」「人間好き」「イベント好き」「高いパフォーマー」のものが多く。これに、堅実な教育に関する知識や技術、さらに幅広い教養が備われば、次の時代を担う素晴らしい教師が誕生する。皆さんの学びと成長を期待する。

(出典)

武内清 (教育社会学研究室) 〈<http://www.takeuchikiyoshi.com/>〉。

I 1 2014/12/30
2 2016/5/25, 10/22
3 2014/7/22
4 2016/11/24
5 2016/11/24
6 2016/12/10, 12/23
7 2015/6/11,
8 2014/11/19
9 2015/8/30

II 1 2014/10/5
2 2016/10/18
3 2016/10/6
4 2015/5/5
5 2015/2/25
6 2016/3/6
7 2014/12/19

III 1 2015/8/11
2 2015/10/29
3 2016/3/23
4 2014/11/21
5 2016/11/19
6 2015/1/19

IV 1 2015/5/9
2 2015/10/9
3 2017/2/14
4 2016/9/14
5 2017/3/30